
愛をする魔王様

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛をする魔王様

【Nコード】

N4382Z

【作者名】

ピヨ

【あらすじ】

愛とは至上の行為である。愛を尊ぶ魔王様は仰いました。だから魔王様は愛する女を求め、そして喰らうのです。それが、魔王様の愛でした。そんな魔王様の愛を求める娘が一人。娘は言います。私を食べてよ、と

(前書き)

このお話には、人喰い表現があります。
十二分に理解した上でご覧になってください。

私の愛した女達は皆、気高く、美しく、そして強かった。

気高いから強いのか、強いから美しいのか。誇り高く聡明な女達に、私は出逢う度に惹かれ、焦がれた。

私は多くの女を愛した。だから愛する女を求めた。その為ならばどのような手段も厭わなかった。愛していたからだ。私は愛する女達の、その肉塊を喰らった。

愛する女は至上の味がした。

私は女達を愛していた。狂うように求めていた。その身を喰らう事で、我が血肉とし、私と永遠に生き続ける事となる。愛していたから、私は女達の全てを手に入れたかったのだ。

それが愛だ。私は多くの女を愛したが、そのいずれもそのようにして愛した。

私はいつしか魔王と呼ばれるようになっていた。

私が喰らうのは、愛する女だけである。つまり、そんな私があのも、気高くも強くもなく、素朴なだけの娘を生かしたのは、けして愛などではなかった。

あの娘を拾ったのは、娘が十の頃だった。

薄汚れた痩せつぼちの娘が、雨の中森の奥で膝を抱えていた理由は、今でも分からない。未だに興味も湧かないので尋ねる事も無かった。

あのとき、娘を拾ったのは何故だったのか。あえて言うならば、随分と昔に飼っていた猫に目付きが似ていたからだろう。ふてぶてしく、全てを疑って掛かるように暗く、その癖敵意だけは達者な爛々と輝く目をしていた。

気紛れだった。長く生きていた為に懐古趣味のようなものも芽生えかけていた。だから私は、そのとき思いつきで娘に声を掛けた。

『一緒に来るか』

すると、思い切り顔を背けて鼻を鳴らされ、腹が立ったので無理矢理連れ帰った。あまりに突然の行動を取った私に、娘は呆れも怒りも通り越して呆然としていた。少々気が晴れた事は否定しない。

娘は小うるさい娘だった。文句ばかり言っていた。それを無視すれば更に怒りは増した。そして、それさえも無視し続ければ、今度は心が折れてしまったように急にしおれて、泣きながら縋りついて謝罪した。繰り返すように、『捨てないで』と。

娘は自身を大きく見せようと強気な物言いをしたが、所詮そのような事をするのは弱いからに他ならず、惨めで矮小な小娘だった。

私は魔王だったので、些細な事は気にならず、娘がどれだけ喚いたとしてもさして興味は無かった。私が興味を持つのは、愛する女とそれをいかにして愛するかのみである。

魔王に攫われたと言われる娘が、十六まで生き延びた理由など、ただそれだけの事であった。

生意気盛りであった娘は、そう間もなく落ち着くと、今度は何故なのかと甚だ疑問だが、私に懐いた。どこへ行くのにも付いて来たが、ようになる。あまり興味が湧かなかったので、自力で付いて来られる分には好きにさせ、付いて来られないならば置いて行った。その度に娘は懇願するような目をした。娘は他者に依存せねば生きられない。その頃から現在まで、変わらず脆弱で愚かだった。

あるとき、私は娘の前で愛した女を喰らった。高潔で凜とし、怯える事もなく私に戦いを挑んだ、勇ましく美しい女だった。私が愛するに足る女で、やはり格別に美味だった。

私が、娘に対し唯一評価していた所は、何を見ても悲鳴を上げない所だった。理解を超える状況では時折嘔吐する事もあったが、娘は狂乱に陥る事だけは無かった。

そろそろ慣れて来ていたのか、青褪める程度で押し黙っていた娘は、珍しく女を喰らう最中である私に話し掛けた。

『美味しい？』

私は是、と答えた。

『女は美味しいものなの？柔らかいから？』

私是否、と答えた。

『私が愛した女だからだ。私の愛する女は皆、強く美しく、それ故に美味である』

娘は不満そうに口をへの字に歪める。

『愛した女を食べるの？』

『それが私の愛である』

娘はますます不満そうな顔になる。私は、愛する女の最期の一片を呑みこんだ。

娘を連れ帰って三年が立った頃、猿のようであった娘が色気付いた。

『ねえ、あたしを食べてよ。貴方を愛しているの』

寄りにもよって、私に求愛してきたのだ。無様で惨めなばかりの身の上で、娘は私に愛を請うた。

『断る。私が喰らうのは愛した女だけだ』

それは、初めて愛した女を喰らったときに決めた事だった。私はこれまで多くの女を愛したが、初めての女は格別に美味かった。

『食べたなら、愛しくなるかもよ?』

『何故、貴様は食べられない』

『だって、それが貴方の愛なんでしょう?』

娘は朗らかに、けれど深みを感じさせる微笑みを浮かべた。肉体的な変化は以前から感じられたが、それ以上に娘の成長を際立たせた。

『それなら、あたしはそれが欲しいの』

娘は、子どもの我儘のように、大人の駆け引きのように口にした。

近々、私を討伐に、と勇者一行が現われるらしい。私には『人喰い魔王』という大層な通り名が付いており、人間達は奮起して私の排除を試みるようだ。

全く以って失礼な話である。私は何でも構わず食い散らかす知恵無き魔物ではない。私が喰らうのは、あくまで愛する女のみである。

『ねえ、いつになったらあたしを食べてくれる?』

娘は私に纏わりついて尋ねた。世界のどこかで勇者が奮闘している

と聞いても、私の生活は変わらぬままである。私は愛する女を探し求め、娘は私を求めていた。

『貴様は、強くも美しくもない。食指が動かん』

『酷い！これでも女っぽくなったのに』

確かに、ただの子どもであった娘の身体はまろみを帯びて、手足はすらりとし、手入れの行き届いた髪は女性らしさを醸していた。色香を纏うにはまだ幼さが残るが、成長と共に不埒な想いを抱く魔族を引き寄せるようにもなり、怯える娘はこれまで以上に私に纏わりつくようになっていた。

しかし、そんな事は問題ではない。私の愛する女の強さや美しさというものは、容姿や能力ではないのだ。その気高さゆえの心根の強さ、その美しさとなれば、容姿ばかりが育っているだけの娘など、比べるべくもない。

『食べてくれたって、良いじゃない』

拗ねたように口にする娘を、私は常と変わらず無視をした。

ついに、勇者一行は私の居城へと辿り着いた。

拾った頃は十だった娘は、気付けば十六となっていた。私に纏わりつく娘を見た人間がいたらしく、娘は人間達に、魔王に攫われた憐

れな姫君と思われているらしい。苛立ち紛れに引きずって来たので、あながち間違っではない。

勇者は、娘を救い出すと高らかに宣言した。人間の誤解と思い込みの強さには舌を巻く。初めに無理矢理連れ去って以来、纏わりついてくるのは娘の方だ。私は娘を拘束していなければ、どこへ逃げだそうが構わなかった。ただ、娘が自ら私の所に留まっていただけの事である。

相対した勇者一行は強かった。多勢に無勢とはいえ、その強さは脅威であり、感嘆に値する。私が自身の血を見るなど、一体どれ程ぶりの事だっただろう。膝を付いたのは、初めてかもしれない。

それでもまだ、私には余裕があつた。傷付く自身の身体に物珍しさすら感じていた。留めのつもりで放たれた魔術師の攻撃も、受け止める事は出来そうにないが、避ける事ならば可能だった。私は、それでもまだ、優位であつた。

娘が、私の前に飛び出してくるまでは。

まるで、私を庇うように両手を広げ、攻撃魔法の前に立ち塞がった。あの救いようもなく弱いはずの娘が、一切の怯えを捨て、迷いなく立っていた。娘など、その魔法で魂すら吹き飛んでしまうと、本能で理解出来るだろうに。

私は、命を投げ出そうとする愚かな娘から目を離せなかつた。私を護ろうとしているのだろうか。勘違いも甚だしかつた。しかし、娘はあまりに強く、魔法を睨み据えていた。惨めなはずの娘が、しっかりと大地を踏みしめ、その横顔には躊躇いが無い。

私は、何故かすぐに動けなかった。そして、不意に気付いたのだ。私は娘に出逢って以来、『何故』という疑問にばかり埋め尽くされている、と。

「な……で……………」

気が付けば、娘は呆然と呟いていた。この一瞬で娘との出逢いから現在までの事を思い出していた。なるほど、これが人間の言う走馬灯というものか。まさか、魔王である私も見る事が叶うとは。

私は、当初の予定通り、攻撃魔法を避けるべきであった。あの魔法、娘が立ち塞がった所で庇えるものではなく、あのままその場にいれば、結局魔法に襲われただろう。だからと言って、娘を連れて避けるという選択肢は無かった。私一人ならばともかく、娘まで連れる余裕などない。

そんな私が取った手段は、最も非効率的なものであった。私は、私を庇う娘を更に庇い、娘を正面から抱きすくめて、背中に魔術師渾身の攻撃魔法を受けたのだ。

娘ならば意味の無い行為も、私は魔王である。娘に届く事はなく、攻撃魔法は私のみを苛むだけで済んだ。

私は、肉体が限界を訴え、その場に倒れ伏した。娘は信じられない、とでも言いたげな顔をして、その場にへたり込んでいる。

先程までの潔さはどこへいったのだ。娘は元通りの情けない心をそのまま表情にしていた。

「な、で…だって、あたし。なんで、ねえ、やだ、やだよお…っ」

娘は半狂乱になって、私の身体に縋りつく。私の身体はすでに限界を迎え、起き上がる事も不可能だった。精々、二本の腕が動くくらいか。

やはり、脆弱な娘は、子どものようにしゃくり上げて泣いていた。最近では、女性らしくなった身体を自慢げにしていたが、所詮は小娘である。

勇者一行は、一様に愕然として立ちつくしているようだった。憐れな姫君が、攫った諸悪の根源である魔王を庇った事も、その魔王が更に姫君を庇った事も、脳が理解できていないようであった。しかし、それも仕方の無い事と言えるだろう。何故ならこの行動に関して、当人である私も理解できていないのだから。

「何故、貴様は、私を庇おうなどと…」

勇者一行が呆然としている為に、緩やかな死を迎えられそうな私は、唯一それだけが気に掛かった。

娘は泣きながら、叫ぶように言った。

「そんつ、そんなの！貴方が大切だから、に、決まってるでしょ！」

娘は横たわる私に縋りつく。この娘は昔からそういう事ばかりしていた。その弱さに相応しく。

私は娘のその言葉に、娘に求愛されていた事を思い出した。魔力に

よって今しばらく保ってはいるが、私の身体は遠からず崩壊を始め
る。それならば良いか、と気紛れが浮かんだ。

「食べるか？私を。食べても良いぞ。貴様は、私を愛しているのだ
ろっ」

今ならまだ間に合う。これは最期ならば、娘の求愛に応えるつもり
はないが、愛される事くらいなら許容してやっても良いと思えた。
娘は丸々と目を見開いて固まった。やがて、苦しげに顔を歪め、似
合わない無理矢理の笑顔を作った。

「嫌よ。だってそれは、貴方の愛し方でしょ？私の愛は違うもの」

娘は私の頬をその人間らしい体温の手のひらで撫でた。私の頬を両
手で固定して、その唇で、私の唇に口付けた。ふっくらと温かい唇
は、甘美な味がした。

「これが私の愛よ。貴方には物足りないかもしれないけれど」

娘の唇が私のそれに触れた瞬間、初めての感覚が走った。そして、
同時に理解した。私は今も変わらず、私の愛した強く美しい女達の
ようには娘を愛していないが、なるほど。娘の流儀に倣えば、娘を
愛しているのかもしれない。弱さを愛でるように身を寄せ、愚かさ
への恋しさから唇を重ね合う。

そんな愛し方があったのか。

しかし、娘はそれを私に教えるべきではなかった。私は愛を求める
魔王だ。愛する者の全てを手に入れなければ気が済まない。私もま
た、娘の言う形の愛を娘に抱いているのだとすれば、死に逝く私の

選択は一つだった。

「え……………」

どこからか、呆然とした眩きが聞こえたかと思えば、勇者一行から悲鳴が上がった。唯一動く私の手が、娘の身体を貫いたのだ。娘は、血を吐いて、その身を痙攣させている。

「それも愛ならば、私は貴様を愛しているのだろう。だが、それならば、私は貴様を連れていく」

私は、愛し方が違っていたとしても、愛する者を手離すつもりが無い事には変わらない。

娘は力なく血を吐き出して、やがて噎せる気力も無くなると、ゆっくりと微笑んだ。最期の力を振り絞ったその笑顔は、やはり弱弱しく、そして　愛おしいと言うのだろう。娘の流儀では。

「うれ、し…あいし、て……」

そして、娘は絶命した。

魔力の為に生き長らえていた私の命も、とうとう潰えようとしている。娘を貫いた腕さえ力を無くし、支えを無くした娘の身体は地に落ちた。私は、力の入らない震える腕を何とか動かし、娘の頬に触れた。未だ温もりを残す頬を撫で、私は地面に這いずって娘に顔を寄せ、色を無くした娘の唇に口付けた。

それは、私が行う、最初で最後の愛し方だった。

私は多くの女を愛した。いずれも気高く聡明で、強く美しい女達だった。私はそんな女達を喰らった。愛していたから、その全てを手に入れたくて。

私は命の最期に、口付けという愛し方を知った。そうして愛したのはただ一人。

彼女は私の愛した、唯一の人である。

(後書き)

読んでいただいております。ありがとうございます。しかもこんなちょっとカニバってるのを…！

人物紹介

魔王：愛多き魔王様。ただし、その表現はお食事。初めて愛した女に『愛しているなら私を食べて』と請われ、以来それこそが愛だと思ひ込み、そうして多くの女を愛してきた。

娘：反骨精神逞しい生意気さだったが、その実臆病で脆い。魔王を慕う一方で捨てられる事を酷く恐れる。死も、魔王の愛も恐ろしいと感じる一般的な感性を有していたが、それ以上に『愛される』事に焦がれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382z/>

愛をする魔王様

2011年12月15日01時48分発行